

私たちの生活と食料生産	()組	氏
	()番	名

みさきさんは、「宮崎牛 日本一2連覇！」というニュースを見て、「たくさんの牛や豚が口でい疫のひ害にあいながら連続日本一をとるなんてすごい！ 宮崎県のちく産にはどんなひみつがあるのだろうか？」と思い、宮崎県のちく産について調べていくことにしました。

表 みさきさんの予想

予想ア	宮崎は、全国的に見て牛や豚の生産がさかんなのではないだろうか。
予想イ	宮崎の気候や自然が、牛や豚などの飼育に向いているのではないだろうか。
予想ウ	日本一の牛を生産するための、さまざまな工夫がされているのではないだろうか。

資料をていねいに読みとっていくことが大切です。

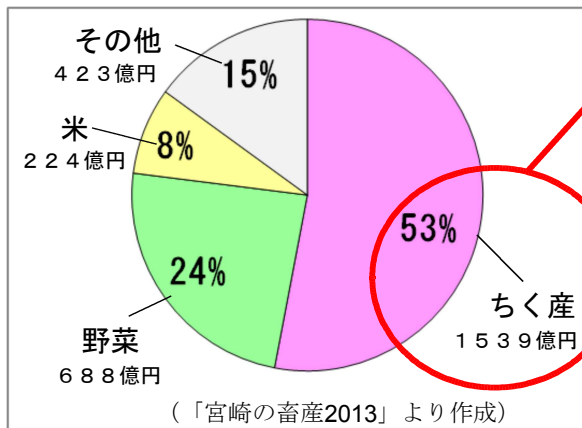
みさきさんとのはるきさんは、下の資料1、2、3を見つけ、みさきさんとのはるきさんの予想を確かめよう。資料1、2、3を見つければ、みさきさんとのはるきさんの予想が正しいかどうかを確かめよう。

資料3を見ると、豚とブロイラーが1位、肉用牛が2位となっています。

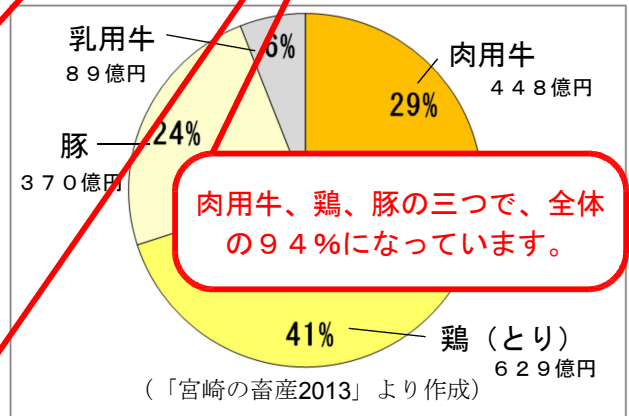
①	ちく産
②	2
③	肉用牛
④	鹿児島
⑤	ブロイラー

みさき：野菜や米よりも（①）の産出額が多く、全体の半分以上になってるね。
 はるき：そうだね。資料（②）を見てみると、「（③）と鶏と豚」の三つで、全体の90パーセントをこえているね。
 みさき：全国的に見ても、宮崎県は、北海道や（④）県とならぶ「ちく産王国」だということが分かるね。
 九州全体の飼育数をみると、（⑤）は、全国の約半分を九州がしめているよ。

【資料1 宮崎県の主な農業産出額】



【資料2 宮崎県のちく産の産出額】



肉用牛、鶏、豚の三つで、全体の94%になっています。

【資料3 ちく産のようす】

(「畜産統計」、「食鳥流通統計」より作成)

品名	全国の飼育数	九州全体の飼育数	全国の順位 (都道府県別)		
			1位	2位	3位
肉用牛 (頭)	272万	98万	北海道 53万	鹿児島県 35万	宮崎県 25万
豚 (頭)	973万	308万	鹿児島県 136万	宮崎県 88万	千葉県 65万
ブロイラー (羽)	1億	4966万	鹿児島県 1921万	宮崎県 1838万	岩手県 1540万

下の資料4と資料5は、みさきさんが前のページの予想イや予想ウを調べるために、県庁の人や農家の人に取材をしてまとめたものです。

(2) これらの資料をもとに、次の【みさきさんのまとめ】の(⑥)～(⑩)にあてはまる言葉や文を書きましょう。

【みさきさんのまとめ】

予想イについて	宮崎は(⑥)のひ害を受けやすい所であるが、ちく産はそのひ害を受けにくいということや、(⑦)気候なのでえさとなる青草がたくさんとれること、台地や斜面が多いという地形の特ちょうを生かすことにより、ちく産がさかんになった。	
予想ウについて	目的	工夫や努力
	せん伝・PRのため	宮崎で生まれた牛を大切に守り、宮崎牛を(⑧)化する
	えさを工夫するため	えさのほとんど(90パーセント)を(⑨)
	体をきたえるため	(⑩)

⑥	台風	⑦	冬でもあたたかい	⑧	ブランド化する
⑨	自給している(自分でつくっている)				
⑩	毎日水田を歩かせている(水田を歩かせることで足首や足腰をきたえている)				

【資料4 県庁の方の話】 (農政水産部畜産振興課)

もともと宮崎や鹿児島などの南九州は、冬でもあたたかいので、えさとなる青草が育ち、牛や馬などの動物を飼育するのに向いている気候条件であるといえます。⑦

また、南九州は夏から秋にかけて台風のひ害が心配されるのですが、ちく産の場合は、農作物と比べると台風のひ害を受けにくいという特ちょうがあります。⑥

さらに、地形的に山地の多い宮崎県は、米づくりなどには向いていない台地や斜面が多いのですが、こうした場所でもちく産を行うことはできます。

そこで、県の取組としてちく産を推進してきたこともあり、ちく産がさかんになってきました。県と農家の方たちが協力し、宮崎で生まれた牛を大切に守ったり、宮崎牛をブランド化したりして、宮崎のちく産がますますさかんになるようにがんばっています。⑧

【資料5 日本一の和牛を育てた農家の方の話】

平成22年には、飼育していた39頭の牛が「口てい疫」のために、全頭殺処分されました。その中には生まれたばかりの子牛もいました。「牛を育てるのは、もうやめよう。」というぐらいに、苦しみましたが、「日本一の牛を育てる」ことを目標にがんばりました。⑨

私は、水田で飼料作物を栽培しており、えさの90パーセントを自給しています。

また、毎日、畜舎の前にある水田で牛を歩かせています。歩きにくい水田を歩かせることで、足首や足腰をきたえることができます。⑩

牛を育てるには、生き物が相手ですから愛情が一番大切だと思っています。私は「牛は家族の一員だ」と思って育てています。